

第6回 JLPP 翻訳コンクール 英語部門講評

比較文学者、東京大学名誉教授
井上 健

小説部門の課題文、鹿島田真希「波打ち際まで」(2012)は、フランスのアンチ・ロマン小説を連想させる筆法で、一人の女の日常に潜む危機と心理の綾と崩壊の予兆とを入念に描き出したもの。作品中で言及される「かのバールベックの海岸にいた乙女たち」とは、言うまでもなく、マルセル・プルースト『失われた時を求めて』(『花咲く乙女たちのかげに』)へのオマージュである。ヒロインの内的独白体に、回想された会話と、物語の現在の会話とが、描出話法と引用符を外した直接話法とを駆使して織り込まれる。話体の見極めと訳し分け、ヒロインの意識やイメージのつながりを途絶えさせないように訳すことが、とりわけ肝要である。

エッセイ部門の向田邦子「お辞儀」(『父の詫び状』、1978)の訳出においては、人情の機微を書き尽くすその筆致を比喻表現の妙も含めてしかと辿り、みだりに訳し飛ばしたりせず、丁寧に再現することがまずもって求められる。加えて、戦前日本の社会や家族の制度(財閥、家父長制など)、ことに家族形態とその生活様式(子供には個室が与えられなかったこと、床柱の位置など)についての認識が不可欠であるし、同時代日本の風俗・文化についての知識も求められる。早い話、留守番電話の挿話など、黒柳徹子がどういう人物で、なぜ「チャック」という綽名を頂戴しているのかを少しは解説しておかねば、読者にその面白さは十分には伝わらないのである。

最終選考に残った訳稿は力作ぞろいで、上位3点を選び出す作業は困難を極めた。最優秀賞に選出されたLloydさんの訳文は、読解、翻訳表現ともに平均点が高く、僅差ながら、総合点で第一位となった。「お辞儀」については、黒柳徹子の留守録の文言の冒頭部がなぜか間接話法化されていたり、「八つ当たりの感じで飛んできた拳骨」の「八つ当たりの感じで」が訳出されていなかったり、気になるところも散見されたが、総じて、バランス良く、過不足なく、平明にまとめられた訳文であった。まだ21歳とのこと。将来が楽しみだとは、まさにLloydさんのためにある賛辞であろう。

優秀賞のSutherlandさんのものは、ひと言で評せば、原文がしっかり読みこなせていることがよくわかる訳文である。しかも、正しく読み取った結果が、周到に、わかりやすく再構成されている。難点は全体にやや説明過多な点で、敷衍的に訳され、その分膨らまされた記述が、ときに原文のスタイルやテンポの良さを損なっているように感じられた。

同じく優秀賞のKuplowskyさんのものは、達者で感性豊かな訳文、今後に大きな可能性を感じさせる訳文である。鹿島田原文については、「苦しいことなど、過去も、将来もない……」など、細部のミスが多かったのと、向田原文で言えば、「ブンブンしている顔が……」「無理をして自分を……」「……母子げんかになってしまった」「八つ当たり……」などが訳文からは脱落しているのが気になった。訳文の仕上げ、練り上げに、もうひと手間かけるこ

とが望まれる。